



「ピッケノハコ」で活動に取り組む屋代さん（札幌市豊平区で）

札幌「CAN」助成対象に

光と愛の事業団 若者に居場所提供

子どもたちの経済的格差の是正や健全育成に取り組む団体を支援する読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」で、札幌市豊平区のNPO法人「CAN」が、今年度の助成対象に選ばれた。主に10〜30歳代の

生きづらさを抱える若者に居場所を提供する活動に充てられる。

2004年設立のCANは、社会的養護の経験者や家族を頼れない若者の孤立を防ぐ取り組みを続ける。当初は電話相談が中心だっ

たが、10年4月に自立支援ホーム事業を開始。20年9月には自由に立ち寄れる場所を作ろうと、市営地下鉄南北線南平岸駅に近いビルの一室でフリースペース「ピッケノハコ」を始めた。ピッケノハコは木曜日を除くほぼ毎日、「ピッケ」と名づけられた猫とスタッフ数人が常駐し、食事や読書など思い思いに過ごすことができる。利用者一人ひとりの自由を大切に、「理由がなくても人と一緒にいるだけで安心できる」などの声が寄せられている。

代表理事の屋代通子さん（63）は「虐待や貧困など幼少期のつらい経験は見過ごされがちだ。ケアが不十分なまま社会に出ることになった若者を、これからも支援していきたい」と話す。

学校3年

(第3種郵便物認可)

2025年(令和7年)9月12日(金曜日)

子どものSOS 救う場に



郡山の団体 助成金 食堂などに活用

子どもたちの健全な育成に向けて取り組む団体を支援する読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の助成団体に今年度、郡山市の一般社団法人「CARNIVAL WORKS(カーニバルワークス)」が選ばれた。助成金50万円は、子ども食堂の食材費などに活用する。

光と愛の事業団が支援

桑折町の料理店「割烹 仙台屋」で2日夕、ボランティアの高校生や大学生計約20人がおもちゃを広げて待っていると、地域の子どもたちが続々と集まり、「何して遊ぶ？」などと声を上げた。遊んだ後には、仙台屋の協力で夕ご飯が振る舞われた。

団体はコロナ禍の2022年3月、「子どもたちの居場所が減って孤立が深まり、学生たちの活躍の場もなくなっている」と危機感を抱いた江藤大裕代表(49)が設立した。福島市で食事付きの無料塾、桑折町で子ども食堂をそれぞれ月1回

子ども食堂で学生ボランティアや子どもと話す江藤さん(左)(2日、桑折町で)

開くほか、一人親家庭支援など、社会課題の解決に取り組む。

食堂には小学生を中心に、未就学児と中学生が訪れる。江藤さんは「地域の子どもたちが困っている時のSOSを拾える場」と活動の意義を強調する。困っているのに相談できない「つながりの貧困」を解消し、家庭で抱える問題に支援が届くようにすることが狙いだ。

江藤さんが最近感じているのは、物価高の影響で支援を必要とする人が見えにくくなっていることだという。生活苦を感じる人が多い時だからこそ相談しづらく、頼れないのではないかと考えている江藤さん。「つながりを維持して寄りかかれる先を作っておくことが必要。『相談に乗れるよ』という姿勢を見せていく」と意気込んでいる。

(第3種郵便物認可)

2025年(令和7年)9月19日(金曜日)

食費

鉾田の子ども食堂に助成

キッズ王国 月2回昼食無料で提供

光と愛の事業団

読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の今年度の助成先に、子ども食堂を運営する鉾田市の認定NPO法人「キッズ王国」が選ばれた。助成金20万円は、食堂の食材費や、イベントの開催費などに充てられる。



食堂にきた子どもと話す代表の
野村さん(右)(鉾田市で)

キッズ王国は2019年に設立された。子どもたちの居場所をつくらうと、共働き家庭などを含む中学生以下の子どもの保護者を対象に、21年から子ども食堂「タベルナ」を運営。鉾田市の社会福祉協議会で月2回、昼食を無料で提供している。

食堂が始まる午前11時半には行列ができ、用意した100食の弁当がなくなることもしばしば。春にはタケノコご飯、秋にはマスカットなど、旬の食材を取り入れたメニューが楽しめる。

昼食後は、射的で遊んだり菓子作りをしたりするイベントの時間を設けており、保護者も一緒に参加でき、多世代が交流する場となっている。

野村正満代表(77)は、「地

域の子どもたちが気軽にやって来ることが出来る。子育てを縁の下から支えていきたい」と語る。

ひ孫と一緒に食堂を利用するという鉾田市の石橋みどりさん(74)は「栄養バラ

大規模地震想定 常総で救護研修

赤十字県支部

日本赤十字社県支部は17日、本県沖を震源とする大規模地震が発生し、避難所が開設されたとの想定で、救護研修を常総市生涯学習センターで実施した。水戸赤十字病院と古河赤十字病



救護研修で、ベッドにいる避難者役に体調を尋ねる医師ら(17日、常総市で)

ンスのよい食事を食べさせることができるから大変ありがたい」と話し、ひ孫の松原結奈さん(7)は「ご飯がおいしかった。このあと遊ぶのが楽しみ」と笑顔を見せた。

院の医師や看護師、薬剤師ら約80人が参加した。

同支部は2024年1月に起きた能登半島地震で、石川県に医療救護班や災害医療コーディネイトチームを派遣した。今回の研修では、避難所での医療支援体制構築や関係機関との連携強化を重視したという。

訓練では、「体調を崩した避難者役」の人に聞き取りをして病状の重さを判断し、適切な医療措置につなげた。間仕切りの設置など避難所運営にも携わった。

参加した水戸赤十字病院の田山賢太郎医師(31)は「いろいろな傷病者がいて、救護チームをまとめるのが少し難しかった。災害現場では情報が錯綜するので、指揮系統をしっかりさせた」と話していた。

(第3種郵便物認可)

2025年(令和7年)9月30日(火曜日)

第13版

第24頁

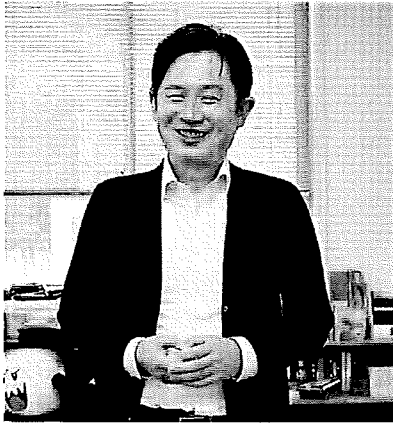
10代居場所NPOに助成

光と愛 フリースクール運営法人

県内でフリースクールを運営する前橋市のNPO法人「ターサ・エデュケーション」が、子どもたちの健全な育成に取り組む団体を支援する読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の助成団体選ばれた。助成金50万円が贈られ、同法人は10月に開設する不登校でない若者も利用できる「ユースセンター」の運営費などに充てる予定だ。



①こらんだむで過ごす子どもたち②活動について語る市村さん(いずれも25日、前橋市で)



25日、同法人が前橋市で運営するフリースクール「こらんだむ」には子どもたちの楽しそうな声が飛びかっていた。施設では勉強や読書、カードゲーム、科学実験プログラムの体験などができ、この日は卒業生2人も訪れ、楽しそうに交流していた。

同法人は2016年9月に県内で初めて不登校の子どもを対象にしたフリースクールの運営を始めた。不登校の児童生徒が増える中、学校や家庭以外で子どもたちが安心できる居場所

を提供したいと考えたためで、今では太田市も含めた2校を運営している。

これまでの卒業生は約50人に上り、多くが学校に戻ったり、進学や就職をしたりと社会の一員として活躍しているという。代表理事の市村均光さん(40)は「居場所があるからこそ気持ちの明くなり、やりたいうことも見つかる」と強調する。

一方、こらんだむは不登校の6歳〜18歳が対象で、毎月の利用料も必要となる。フリースクール卒業後や、不登校でなくても居場所がないと感じる子どもの支援が課題となってきた。

このため、「子どもたちと継続的に関わる居場所が必要」(市村さん)として10月からは10代の若者が週に1回、リラックスして過ごすことができる「ユースセンター」をこらんだむ

前橋校と同じ前橋市表町の、前橋第一ビル4階に設けることにした。

センターは毎週木曜の午後4時〜6時に開き、利用は無料。予約不要で訪れ、雑談や学習、個別相談など一人ひとりが自由に過ごすことができる。また、利用者がセンターの企画運営にも携われるようにする。

市村さんは「何をするか

いせさきまつり楽しむ百人みこしなど



山車に乗って太鼓をたたく子どもたち(27日、伊勢崎市本町で)

伊勢崎市中心部の本町通り周辺で27、28の両日、「いせさきまつり」が開かれ、多くの人が恒例の祭りを楽しんだ。

初日の27日午後6時頃から

は、ずらりと並んだ25台の山車に乗った地元の子どもや大人が約1時間にわたって太鼓や笛を演奏して祭りを盛り上げた。家族や友人と訪れた同市安堀町の会社員星野巧輝さん(28)は「今年もきれいだ。すごく盛り上がっていてうれしい」と興奮気味だった。

28日夕には重さ約1トンの「百人みこし」が登場し、法被姿の約500人が交代で担いで中心部を練り歩いた。

ブタ肉相場

群馬県肉卸市場(群馬食肉卸市場)キロ・円

	高値	安値	平均
極上	648	583	617
上	734	540	611
中	702	248	567
並	691	140	460
等外	669	86	334

県内8市場と栃木・足利の青果市況(高一安キロ)

前橋(総合市場)	高崎(青果市場)	太田(魚業協組)	沼田(魚業協組)	価格・円	渋川(魚業市場)	境(席地)	桐生(魚業市場)	館林(総合市場)	足利(席地)
194 238 540 180 972 378 648	76 238 621 43 162 189	86 194 270 158 324 238	76 238 621 22 324 162	コンソメ イモ ジャガイモ ジャガイモ ジャガイモ ジャガイモ	238 216 486 140 1080 378	140 140 140 140 140 140	108 175 270 216 1053 675	140 151 194 151 432 270 540	216 134 182 194 194 216 759

は子どもたち次第。寂を感じたり、毎日がつなないと思ったりしたらほしい。ここに居場所ります」と利用を呼び

NPO「羽生の杜」を助成

光と愛の事業団

読売光と愛の事業団は、今年度の「子ども育成支援事業」の助成先として、県内から羽生市のNPO法人「羽生の杜」を選んだ。同事業は、子どもの健全育成に取り組み、団体を支援するもので、助成金50万円は同法人が運営する「みんなの食堂」の物資購入などに充てられる。

困窮世帯に食料提供

13日に開いた食堂には、同市民の女性8人と、県立羽生高校の生徒ら5人がボランティアで駆けつけた。女性たちはサラダを作り、生徒たちは飲料品などの仕分けを行った。牛丼チェーン「吉野家」から提供を受けた弁当と一緒に、利用者の35世帯115人に配った。

同法人の理事長、田村信



支援物資の仕分けをする高校生に声をかける田村さん（左）（13日、羽生市で）

征さん（82）は「食堂の運営が続けられるのもボランティアの皆さんの協力のおかげ」と感謝の言葉を口にしている。

同法人は低価格で食事を提供する食堂を月2回、食材などを配る「フードパントリー」を年6回開催している。利用者は、ひとり親世帯や一人暮らしの高齢者など、生活に困窮する人たちだ。

食堂では当初、利用者は食卓を囲んで食事をしてきたが、新型コロナウイルスの流行後、弁当を手渡す方式が続いている。田村さんは「一緒に食事をす

ることを負担に感じる場合もあり、食卓を囲む形に戻すのは難しい」と指摘する。

それでも、施設内に子どもたちの遊びの場を設け、親同士も楽しく交流ができる居場所づくりを目指して活動している。

物価高の影響で、ひとり親世帯の困窮の度合いは増している。市内では5団体が子ども食堂を運営しており、利用者が複数の食堂を訪れることができるように、各団体間で日程の調整もしている。

企業や団体などから集まる支援物資には、ばらつきがある。助成金は、不足している物資の補充などに充てるといふ。田村さんは経済的に厳しい状況に置かれた弱者に寄り添い、食を通

むかしカレー（兵庫県）

素揚げ

兵庫県北部のとれた小ぶりの（ヤマ）カレー、加工した。素揚げで味うと、感と潮の香りが、ホタルイカの水揚げで知

但馬漁協直販加工部の「商品価値が低い小型工し、有効活用する取組み」まで続けてきました。毎つです。むかしカレーは日間、常温保存ができるとしてもおすすめです」

じて人と人がつながる地域づくりをしていきたい」と話す。

秩父・大滝でバスツアー

落石事故による交通規制などで観光客が減少した秩父市大滝地区を応援するため、秩父地域おもてなし観光公社は10～11月の計4日間、日帰りバスツアーを実施する。

10～11月の計4日 観光客呼び込みへ

客の足が遠のいた。約200世帯の地区住民も不便を強いられ、建設中の「大滝トンネル」（2053m）が同30日、暫定的に開通した。

同公社によると、バスツアーは西武秩父駅発着で、三峯神社と麓の「道の駅大滝温泉」を訪れる。トンネルの暫定開通に伴う週末の渋滞も予想されるため平日に行う。歴史に詳しいガイドや、英語対応が可能なスタッフも同行する。

詳しくは、同公社ホームページ（<https://www.chichibu-omotenashi.com/2025/09/7848/>）。

(第3種郵便物認可)

2025年(令和7年)9月12日(金曜日)

言置

置

衆斥

屋門

子ども支援 2 団体助成

光と愛の事業団

読売光と愛の事業団(東京)が毎年公募で実施している「子ども育成支援事業」の助成団体として、県内からは今年度、子ども食堂を運営するNPO法人「Connection of the Children」(横浜市西区)と、フリースクールの「おっち塾」(同市戸塚区)の2団体が選ばれた。2団体には、40万~50万円が助成される。

NPO法人「Connection of the Children」



放課後に食事を作る子どもたち(8日、横浜市西区)

かながわ教育

ごはん作り教える食堂

従来型の食事を提供する子ども食堂ではなく、子どもも自ら作る取り組みを行っている。「自分の手でおいしいご飯が作れるように教えられる場所を作りたい」と代表の加藤功甫さん(37)は話す。

「いもがつつくる食堂」と題して今年4月から、取り組みをスタート。週に1、2日、子どもたちは法人が

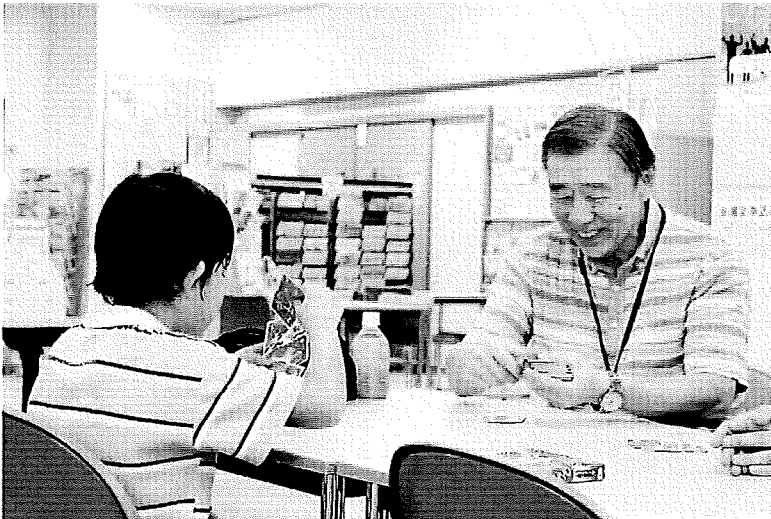
改修した古民家集まり、「豚丼」や「ニラ玉」など、作りやすくおいしいメニューを、ボランティアの人たちから作り方を教わりながら、料理して食べている。

助成金は食材費やボランティアスタッフの交通費などに充てられる。加藤さんは「食費が高騰する中、とても助かり、ありがたい」と話していた。

「第3の居場所」を提供

フリースクール「おっち塾」

2008年に設立。不登校や学習の遅れがみられる小学生から高校生、日本語が不自由な外国籍の子どもたちなどに「第三の居場所」を提供しようと、フリースクールを週3回開いている。放課後に集まった子どもたちがボランティアの人たちとマンツーマンでカードゲームや会話を楽しみ、勉強にも取り組む。今回の助成金を使って、10月に伊勢原市大山にある宿坊で1泊2日の宿泊体験を行う予定だ。修学旅行に行ったことのない子どもや日本文化にまだなじみの薄い外国人らが、日本の文化や歴史を学びながら楽しめるよう企画した。過去の宿泊体験では予算をオーバーして寄付を募ったこともあったが、塾長の但馬香里さん(51)は「今年はこの助成金のおかげで子どもたちが思い出をつくれる」と笑顔で話した。



放課後にカードゲームをして楽しむ子ども(9日、横浜市戸塚区)

子ども育成支援事業
ドバンクに食料配送



活動は全てボランティアが担っており、支援を受けた家庭が「恩返しをしたい」と参加するケースもある。

助成対象となった書籍配
布事業は、能登半島地震や
24年秋の水害を受け、手元
に書籍がない子どもたちに
本を贈ろうと始まった。助
成金は、約7000世帯に
書籍を配る費用に充てると
いう。

同会事務局長の小林淳と

ん(54)は「助けを求める子どもたちに、物資を通じて社会のエールを届けたい」と話している。

幕下

三段目

序二段

[illegible]

おくやみ

【新潟市】
(25日まで)

▽北区

松浜本町
1

7頁区

▽東区

奏町上

丹山 4

香港 1

松園
2

▽江南区

告白

電田向陽2

▽秋葉区

大橋ちや子さん75
和田綾さん95
白井トシエさん76
山越和子さん95
野崎良子さん99
佐藤トシイさん92
石本恵子さん83

磐田の市民団体に助成

こども食堂食材費に

光と愛の事業団

読売光と愛の事業団が創設した「子ども育成支援事業」の助成団体に今年度、磐田市の市民団体「あいっえおおプロジェクト」が選ばれた。助成金40万円が贈られ、こども食堂の食材費などに充てられるという。

「お肉がたくさん入ったお弁当だよ。しっかり食べてね」。今月10日、健康食品の旧店舗に夕方5時半頃、5人が朝から食材の買い出し



訪れた子どもに弁当を手渡す森本さん（10日、磐田市で）

しに回り、調理ボランティア5人が弁当を仕上げていった。

お肉たっぷりのお弁当とサラダボウルを受け取った30歳の母親は「体を壊して仕事ができないので、ありがたい。野菜が多いのもうれしい」と話し、前回受け取った弁当箱を返却していた。弁当とともに、米や菓子、インスタントラーメンなどを受け取った4歳の男児も「ありがと」と笑顔を見せた。

団体は2021年、代表の森本純子さん（46）が中心となって、少年野球クラブのママ友たちと結成。看護師経験もある森本さんは子育て中、体調を崩し2週間ほど入院した際、近所のママ友が親切に接してくれ、救われた思いをした。「恩

返しをしたい。困っている人の助けになりたい」と思ったという。

ただ、こども食堂を開いた当初は、和気あいあいの楽しい雰囲気は作り出せても、「本当に困っている家庭に行き届いているのだろうか」との葛藤があった。2年前から、来訪者と面談を重ね、ひとり親家庭や多子家庭など困窮世帯に対象を絞った。

現在は磐田市などの20世帯72人が登録している。月4回、弁当を配ったり、カレーやハンバーグなどの温かい食事を振る舞ったりしている。食材、物資は、寄付や企業などからの補助金で賄い、定期的に1万円を寄付してくれる90歳代女性もいるという。

森本さんは「メンバーたちは仕事をしながらの活動なので、毎月バタバタですが、子どもたちがおいしいご飯でおなかも心も満たして笑顔になってくれることが私たちの原動力です」と力を込める。